
神に愛された少女

上野李緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神に愛された少女

【Nコード】

N7787J

【作者名】

上野李緒

【あらすじ】

ペルソナ3ポータブルの女の子主人公（橘 朱里）で二周目のお話。目指すは皆で幸せになること！

キャラクター紹介（前書き）

主人公についての補足などを少々。
もっと早くにアップすべきだったと後悔……

キャラクター紹介

たちばな しゅり
橘 朱里

Lv・99

天才・美しき悪魔・漢

○所属

- ・バレー部
- ・料理同好会
- ・手芸同好会
- ・図書委員会
- ・生徒会補佐
- ・特別課外活動部（補欠要員）

○性格

今まで、親戚をたらい回しにされてきた為、無意識にいい子である
うとする傾向にある。

争いはできうる限り、回避したいと思っている。

発言内容がたまに、天然。

仲間の服装に関しては譲らない（特にメイドと紳士服）

○オリジナル設定

ファルロス・ニュクスのお母さんの存在。

体内にニュクスが封印されている。

ユニバースの力を持っている（でも、使い熟せてはいない）。

目指すは、皆で幸せな未来！

ニユクス

ニユクス本体の化身。

10歳位の少女の姿をしている。

ニユクスにとって、主人公〃お母さんで主人公のことが大好き（家族愛）

ファルロス

デスであり、望月綾時でもある。

主人公と繋がっているため1周目の記憶を持つ、主人公の協力者。綾時のときより純粋に主人公を慕う（家族愛）。

キャラクター紹介（後書き）

他キャラクターについては、まとめしだい随時アップしたいと思います。
す。

序章・優しい眠りと目覚め（前書き）

主人公ご都合主義で話を進めています。

序章：優しい眠りと目覚め

ニユクスの脅威は去った。

ニユクスは眠りに付き、影時間は消え、人々の記憶からも影時間は消えた。

勿論、私以外はだけれど。

今、私たちは普通の高校生として、日々の生活を過ごしている。

何をきっかけに仲良くなったとか、皆は全てを忘れてしまったけど、自分で思い出すしかないから、私は何も教えない。

ただ、3月に近づくに連れて違和感を感じはじめてはいるみたいだった。

そして私かというと、毎日のようにコミュ関係者に会いに行く。

校内で会える人に始まり、校外で会う人、縁の場所に顔を出したり付け加えるなら、疲れが取れないのか眠る時間が増えているくらいだろうか。

今の私は、授業の大半を居眠りし、寮に戻ってもすぐに寝てしまう。

約束の日

―― 3月5日

起きるのが辛くておもいつきり寝坊してしまったが、取り敢えず約束の場所に向かおうと思う。

そこに、アイギスが訪れた。

今までのことを思い出したらしい。

アイギスと共に屋上へと向かう。

きつと、彼等らは来てくれるはずだから。

アイギスの見守る中、私は皆の足音を聞きながら目を閉じた。

目を開ければそこには一面の白い天井。
屋上にいたはずなのに。

「…あ、気がついた…？き、気分は…どう？」

体を起こすと、ゆかりがいて私の様子を窺っている。

『ここ、どこ?』

周りを見回して、問い掛ける私を見て、ホッとしているようだった。聞くに、私は一週間近く眠り続けていたらしい。

「あ、あのさ… ごめんね。あの時は、何も出来なくて…」

心配させてしまったことを詫びようとおもったら先に謝られてしまった。

そのうえ、何のことだかさっぱりわからない。

口を開くとややこしくなると思い、黙っておく。

「でも驚いた。… スゴいね、あの力」

『なんのこと?』

ペルソナ以外に不思議な力は持っていないはずなんだけど……

そう思って口を開こうとしたそのとき、ゆかりの発言に私は動きを止めてしまった。

ペルソナのこと、シャドウについての簡単な説明。

一ヶ月ほど前に、影時間は消えてシャドウは出現していないはずなのに。

何かがおかしい。

『…… 今日の日付は?』

「今日は19日。4月19日よ」

『…… 嘘?!』

「驚くのも無理ないわ。10日も寝てたんだから」

夢オチとか？

きつと、寝ぼけてるんだよね。

うん、もう一度寝てしまおう。

考えることを放棄することに決めた。

ゆかりが慌ててナースコールを押してくれるのを横目に眺めて、私は目を閉じた。

次、目を覚ましたら3月5日であることを願って。

目を開けても、眼前に広がるのは真っ白な天井で、少しだけ落ち込んだ。

世の中、そんなに甘くないんだなあと再確認させられた気分だった。

神様、私何か気に障ることもしましたか……？

序章：優しい眠りと目覚め（後書き）

週一で更新できるように頑張ります。
応援よろしくお願いいたします。

1章：リスタート（前書き）

女主人公の皆で幸せ計画のスタートです！
応援よろしくお願いいたします。

1章：リスタート

大切な話があるとかで、夜に理事長室に集まるように言われたので、どこにも寄らずに寮に帰る。

話とは影時間のことやシャドウのこと、影時間の適性とペルソナのことなどだった。

知っていることだったけど、変に思われるのも嫌なので無難な答えを返す。

最終的には、特別課外活動部に入って欲しいと誘われた。

そこで、重大なことに気づいた。

イレギュラーのシャドウを倒す「ニユクスの召喚」世界の滅亡

という図式を。

悩んだ末、仮入部もしくは補欠要員扱いにして欲しいと願い出る。

私には、やりたいこと・やるべきこと（荒垣・桐城先輩のお父さんを助けることとか、綾時と共存できるようにするとか）があるから、いつでも戦いに参加できるわけではありません、と念を押しておく。

不思議なことに、今まで（正確には過去か？）頑張ってきたお陰で、異様に身体は軽いし、度胸も、知識も、魅力も最高ランクを維持している。

今なら、眼鏡の寒いギャグを連発する狂ったおっさんを強襲できる気がする。

というより、今すぐやっちゃうべきだと思う。

私の平穏と平和の為にも。
ついでに、世界の為にも。

課外活動部に入部したその日、部屋で休んでいると私には慣れ親しんだ気配を感じた。
影時間にのみやって来るファルロスの気配を。

「やあ、元気かい？ また会えたね朱里」

「また会えて嬉しいよ、ファルロス」

「僕も嬉しいよ」

「…… 頑張つて、皆と一緒にいられる未来を創ろうね」

「…… うんっ！」

ファルロスは嬉しそうに笑う。

朱里も笑い、ファルロスの頭を撫でていたとき、ふっと疑問が浮かんだ。

「そういえば、ファルロス。 今は私の中にいる状態なの？」

「そうとも、言えるかな？ 僕というか、ニユクス’が宿つてると言ったほうが正しいけど」

「？」

「今の君には、ニユクスそのものが宿つてるみたいなんだよね」

「…… それって大丈夫なの？」

「大丈夫だと思うよ？ 一応、僕の本体だし。 いつかは、僕みたくに感情豊かになるかもしれないね」

「……」

幸先、不安になるようなことを言わないで欲しい。
……頑張ってみるけど。

次の日も、夜は寮の作戦室に集まるように言われた。

まだ、部活動にも入っていないし、何かしらのコミュニケーションも発生していないので、寄り道もせずに寮に帰る。

作戦室に集まると、真田が順平を連れて現れた。

最近、ペルソナに目覚めたらしい。

新人とはいえ、戦える頭数が増えたことによりタルタロス内の散策が始めることになった。

学校の前で、0時になるのを待つ。

影時間になったとたんに、学校はタルタロスへと変貌していく。

「俺達の学校どこに行っちゃったんだよ！」

私にとっても初めてタルタロスを見たときも、順平はこんな風に驚いていたなあと思う。

中へ入ると見慣れたエントランスが広がっていた。

そこに懐かしい青い扉を見つけて、早速中へと入ると見慣れたおじいちゃんと青いエレベーターボーイがいた。

「ようこそ、ベルベツトルムへ」

「お久しぶりでございます」

『えーっと、今の私に必要なから、扉が現れたってことですよね？』

「ええ。今回は、以前作られましたペルソナ全書を用意致しました。存分にご利用ください」

『また、お世話になります』

早速、ペルソナに必要なアルカナの分だけ買い占めておく。

取り敢えず、しばらくはリーダーとして活動しようと思う。

1章：リスタート（後書き）

感想をもらえたら嬉しいです。

2章：初タルタロス（前書き）

主人公、暴走中。

または吹っ切れたともいう。

2章：初タルタロス

向かうところ敵無し of 私にはエリアボスのシャドウなんて一撃で瞬殺。

すでに私に向かってくるシャドウは皆無だ。

おかげで一日で登れる所まで上がりきってしまったわけだが。

結果、二人からはあまりの無双っぷりにドン引きされた。

サポート役の桐条先輩はというと、正規の部員にならないかと常に勧誘してくる。

全て断っているが。

このままでは、仲間のレベルがなかなか上がらないままなので、モナドを探索するという暴挙にでてみた。

タルタロス探索3回目。

現在のゆかり・順平のレベルは共に8。

勿論、二人の意見は無視の方向で。

――戦果報告

ゆかり死亡回数8

順平死亡回数12

常に弱点以外の攻撃で一撃で死亡。

結果、ゆかり・順平共にレベル30越え。

また、ゆかり・順平共に風邪になった。

ゆかり・順平は朱里に対して、とても従順になった。

これですばらくというか、次の次の満月まで持つだろう。

二人でもたいていのシャドウを相手できるだろうから今度から別行動しようと思う。

まあその前に、しばらくは風邪で動けないだろうけど。

学校が終われば、部活動・生徒会・委員会。

たまに、ゆかりや順平と交流してみたり、何もなければ古本屋が神社に向かう。

夜は、バイトと称して坊さんや社長に会いに行く。

影時間には、ファルロスと作戦会議という名のお喋りをしてみたり、寮を抜け出してタルタロス探索をファルロス達としてみたりと、随分と充実している。

当然、勉強はしない。

そして、今日も影時間がやってきた。

ファルロスの後ろには、ファルロスよりも幼い、でもファルロスに雰囲気似ている少女がいた。

「遊びに来たよ」

「……」

『いらつしゃい、ファルロス。その女の子は？』

「ニコクスだよ」

『本当に出てきたんだ。朱里だよ、よろしくね』

「僕らを育ててくれているんだよ。お母さんみたいなものかな？」

「……お母さん？」

「そう、お母さん」

『……そこ、お母さんを定着させない』

私はまだ、１７歳（時間的には１６歳だけど、気持ち的には１７歳）だつっの。

「……違うの？」

ふええ、と泣き出しそうな表情に慌ててしまう。

『違わくないよ！ だから、泣かないで！』

「お母さん？」

『……なあに？』

慌てる私を笑いつつ、助けないファルロスは取り敢えず、あとできつちり仕返ししておこうと思う。

2章：初タルタロス（後書き）

文章中の戦闘不能回数は実話。
自分以外が死にまくる罫。

それにしても、ゲームをプレイしながらなので、なかなか話が進まない。

それでも、更新ペースは上がるよう頑張ります！

番外：お母さんと呼ばないで……（前書き）

ニユクスと主人公の攻防戦

番外：お母さんと呼ばないで……

—— 影時間 巖戸台寮の自室にて

「遊びにきたよ」

「きたの」

部屋に現れたのは、少年・少女の二人。

少年の方はファルロスなのだが、なんと少女の方はニュクスだった
りする。

最近、自我が芽生えたニュクスはファルロスと一緒にでてくるよう
になったのだ。

『いらつしゃい、二人とも』

二人は頭を撫でてあげると嬉しそうに笑う。

「あのね、お母さんのこと、大好き！」

抱き着いてくるニュクスを抱き留める。

「あ、ずるい！ 僕も！」

そう言つて、ファルロスも抱き着いてくる。

ニュクスにとって私は‘母親’のようなものらしく、17歳で子持
ち状態になってしまった。

ちなみに、タルタロスに行かない日の影時間には、必ず遊びにくる
し、タルタロス内でも、一人にいるときには一緒にいたりする。

慕ってくれるのは嬉しいのだが、まだ17歳なのだからお母さんは止めて欲しかったりするのだが、ニユクスが泣きそうな顔をするので、徐々に名前にシフトしていこうと思っている。

『……できれば、朱里って呼んで欲しいな』

「朱里母さん？」

『……今はそれでもいいよ』

「ドンマイ（笑）朱里母さん」

『ファルロスは名前で呼んでよ！』

なかなか上手くはいつてないけれど。

番外：お母さんと呼ばないで……（後書き）

今回は、ニユクスの勝利。
多分、一生勝てない（笑）

3章：満ちる月

5月に入り、後数日で私にとって初めての満月を迎える。

解決策といえるかはわからないが、満月の日には私は皆とは別行動しようと思う。

共存する方法を探すために。

犠牲のある幸せではなく、皆で幸せになりたいから。

今日は、タルタロスにて満月の日のイレギュラーシャドウの作戦会議をする。

一応、寮の部屋にはカメラがついているので、念のために誰も現れないだろう、タルタロスを選んだ。

取り敢えず三人で、分かっていることをまとめておこうと思う。

- ・満月は5月9日。
- ・出現場所はモノレール内。
- ・イレギュラーは一体。
- ・ただ、倒すのではダメ。

『……問題は倒すと、デスが成長しちゃうってことだよね』

「成長すれば、僕は綾時として影時間以外にも出てこられるんだねどね」

『だからといって、世界を滅ぼすわけにもいかないし、また、ニユクスと戦うのも勘弁かな』

「お母さんと戦うの、嫌」

「まあ、一番いいのは、僕は成長できて、ニユクスが滅びを望まな
いでいられることなんだけどね」

「？」

意味が分からなかったのか、ニユクスは首を傾げている。

『今のニユクスが滅びを望むとは思えないけど？』

「どちらかというと、デスが完全に一つになったときに、滅びを望
む者が多いといけないんだよね。タルタロスの頂上で審判の鐘が
鳴ったらアウトってことさ」

『確か、前のときは……』

思い出されるのは、最悪の光景。

十字架に括られた自分達。

絶命する理事長と桐条先輩の父親。

理事長は望んでいた、世界は一度滅びるべきだと。

だから、ニユクスは降り立った。

「お母さん、痛いのか？ 悲しいのか？ お母さん虐めちゃだめ！」

『ありがとう、ニユクス』

「ありや、怒られちゃった。ニユクスはホントに朱里が好きだね」

「うん！ お母さんはね、一緒にいると暖かい気持ちになれるの」

「そうだね、朱里の傍は暖かいよね」

『……ありがとう』

本当に、二人には愛されているなあと思う。

「まあ、駄目もとで封印とか試してみる？ 倒すことになっても、
まだ、イレギュラーはいるわけだし」

『それしかないか、やっぱり』

「お母さんはニユクスが守ってあげるからね」

「そうだね、僕らも一緒に行くよ」

一人でも、倒せるとは思うが二人からの申し出を喜んで受ける。
こうやって、一緒に道を切り開けることが本当に嬉しかった。

――5月9日当日

先輩には、バイトで遅くなると伝えておいた。

半分本当で半分嘘、そのほうが真実味が増すし、何回かバイトと称して影時間以降に帰るようにしておいた。

お陰で、程々にしろと注意されはしたもの、特に怒られはしなかった。

ぎりぎりまでバイトをして、そのあとは、エスカペレイドで時間を
つぶす。

当然、私服に着替えておいてだ。

その服も、普段着ないようなちょっと男の子っぽいものを用意しておいた。

時刻表を確認し、12時前には出発しているモノレールに乗り込む。
念のため、真ん中の車両へ移動しておく。

後は、影時間になるのを待つだけだ。

——12時 影時間

世界は動きを止め、生物は棺へと変化し、月は緑の光を降り注ぐ。
運よく、車両には自分一人になった。

『二人とも出てきていいよ』

「それじゃあ、行こうか」

「頑張るっ！」

前方の車両にはイレギュラーシャドウの気配を感じる。

桐条先輩が気付く前にけりをつけなければならぬ。

とは言うものの、小物は出て来ないので、ひたすら走るだけだが。

たどり着くと、女教皇のアルカナのシャドウがいたが、何故か大人しい。

ニユクスの気配を感じとっているのだろうか？

何にせよ楽できるなら、好都合だ。

早速、封印とやらを試してみようと思う。

『ところでどうやって、封印するの？』

「……さあ？ 約束の日にニユクスを眠らせた力とか？」

『ユニバースの力…… 今、使えるかわかんないんだよね』

「……もう、倒しちゃえば？」

『……そうだね』

仕方なしに戦闘に移る。

準備は万端だった。

順平達と遭遇したときのことを考えて、ペルソナも普段使用していないものを用意しておいた。

勿論、武器もいつも使うものではなく、今回用に準備したものだった。

レベル99×薙刀（孔雀御前）×メサイア（全ての値が99）
「通常攻撃で一撃

早かった。

有り得ないくらいに、早かった。

あまりの呆気なさに、ちょっと悲しくなったのは秘密だ。

駅のトイレで普段着に着替えて、寮に戻ると先輩達が話合っていた。なんでも、外でシャドウの反応が出たが5分程で消えたらしい。そして、そのことを（私の大キライな）理事長に報告していた。

精神的に疲れたので、早めに自室に上がらせて貰った。

3章・満ちる月（後書き）

更新をもっと早く出来るように頑張りたいです。

4章：テストは得意

翌日は、お疲れモードだったけど、ツカレトレールで疲れを取って早速、街に出て行った。

満月の次の日には必ずお世話になっています。

でも、なんで学校でそんなのが売っているのかは、今だに分からない。

取り敢えず今の状況を説明すると来週からテストです。

皆が来週にあるテストに向けて頑張っているなか、放課後はゲーセンでペルソナの強化と神社で御神籤を引きコミュの強化を行い、夜はお坊さんや社長に会いに行っています。

決して遊んでいるわけではないんです。

テストなんて簡単だとか、ちょっとしか思っていないよ、ちょっとしか。

まあ、要するに勉強なんてしていません。

今日は、開いた時間にベルベツトルームにいる二人に相談に向かう。

『こんにちはー』

「ようこそ、ベルベツトルームへ。 本日はどのようなご用件でしょうか」

『今日は、質問が有って来たんです』

「私どもで答えられる事でしたら、なんなりとズバッと直球でいこうと思う。」

『シャドウを封印する方法はありますか？』

「……随分、直球ですね」

テオに呆れた顔をされた。

地味にム力つくので、彼の苦手なお姉さん達の名前の何かを大量に持ってきてやることにした。

対して、イゴールは何か考えるようなそぶりをし、助言をくれた。

顔は妖しいが、意外に優しいおじいちゃんだ。

「……貴女は、ご存知のはず。すでに、封じていらしゃるので
すから」

分かったような、分からないような感じではあったが、ヒントを手に入れた。

買い物物を済ませてから、寮に戻る。

『ただいま』

「おう、お帰り！ 気分転換にタルタロスいかね？」

『うーん、気が向いたらね』

「俺っちは何時でも行けるからな」

ラウンジには、皆が揃っていた。

小休止しに下りてきたらしい。

「それにしても、大荷物だね」

『これ？ 友人に（嫌がらせという名の）プレゼントするの』

「花と飲み物をか？」

『うん！ きつと面白いくらいに青ざめ……じゃなくて喜んでくれると思うんだ』

「……（……青ざめさせるつもりなのか）」「」「」

満面の笑みを浮かべる朱里。

対称的に他のメンバーはプレゼントをされる者の末路を想像し固まっていた。

『そういう訳なんで、帰り遅くなります』

「……ああ、余り遅くならないようにな。最近、何かと物騒だから」

『大丈夫ですよ、そこら辺の人間やシャドウには負けませんから。じゃあ、行ってきます』

朱里は意気揚々と出掛けて行った。

勿論、帰って来た朱里が、周りが引くくらいに上機嫌だったことはいうまでもない。

5月18日 テスト初日

二度目だけあって、どの問題も簡単でしかたがない。

5月19日

Q “グッドラック”の意味に使われる言葉をチョーズなさい。

A ブレイク・ア・レッグ！

5月20日

Q 赤道付近に住む人が、自転により移動する速度はどの程度であるか。

A・音速より速い

5月21日

Q・カルシウムやマグネシウムの含有量の多い水を何と呼びますか？

A・硬水

5月22日

Q・あまり重要ではない知識ですが、“キトラ古墳”は何県にあるか

A・奈良県

5月23日 テスト最終日

朝、校門で真田先輩にあつた。

今日から復帰するらしい。

取り敢えず、今後の活動については寮で話し合おうということに落ち着いた。

――テスト

20分で全て解き終わった。

暇なので、仲間を観察をすることにした。

順平は青ざめたと思ったら、諦めて寝てしまった。

ゆかりは、悩みながらも回答欄を埋めている。

チャイムになると順平の顔色は絶望に染まっていた。

今日は真田先輩の復帰を記念して、久しぶりに課外活動部のメンバーで、タルタロスに向かう。

まずは、普通に16階から上を目指す。

勿論、休みなんて入れないで上げれる所まであがりきる。

そして、一度エントランスに戻り、モナドの1階に三名様ご案内。

モナド探索二度目となる、順平とゆかりの声なき悲鳴がエントランスに響き渡った。

—— 戦果報告

戦闘不能回数

順平… 5回

ゆかり… 3回

真田… 2回

朱里が一発K.Oしなかった為、攻撃を喰らった回数ともいう

順平はレベルが50になった。

ゆかりはレベルが50になった。

真田はレベルが35になった。

真田から絶対の信頼を得た。

真田からリーダーになるよう頼まれた。

桐条から正規メンバーになるよう進められた。

だが、全て断った。

番外編：仕返し

少女の顔はとてもにこやかだった。
そして、誰もが少女に見惚れていた。

ただ、その手に持ったお酒のボトルとやや大きめの花束が異様な雰囲気を出していた。

ポロニアンモールの路地裏から、ベルベツトルームへと向かう。
青い扉に入ると、調度テオドアー人しかなかった。

『あれ？ イゴールは？』

「ただ今、主は席を外しております」

『まあ今日は、テオに用事があって来たから別にいいけどね。』
はい、プレゼント』

「？ ありがとうございます」

テオに花束とお酒のボトルを渡す。

『飲んでみてよ、美味しいはずだから』

「これは？」

『お酒。私の周りってお酒飲める人いないからテオにあげようと思っ
て持ってきた』

「では、いただきます」

『……どう？』

「美味しいです」

『その花も綺麗でしょ？』

「ええ、そうですね」

テオが飲みこみ、花束に顔を寄せるのを確認しつつ、一番大切なこ

とを告げる。

『……そのお酒ね、‘クイーンエリザベス’っていうんだよ』

「ぶっ??! ゲホッ!ゲホッ?!」

噴き出してむせる。

『で、そっちの花は‘マーガレット’なんだ』

「!?!」

バサッと腕の中にあつた花束を落とす。

面白いくらいの反応を示すテオに内心大爆笑だ。

青ざめて固まってしまったテオは、しばらく立ち直れなさそうだ。

『じゃあ、用も済んだし帰るね。お姉さん達によろしく』

勿論、報復が済んだので速やかに帰る。

結果、しばらくテオは使い物にならず、その間、姉のエリザベスと名乗る女性が、イゴールの横に立っていた。

彼女が自分の名前のついた飲み物を所望したので、‘クイーンエリザベス’をあげた。

愚弟（テオの事らしい）に飲ませて遊ぶのだとか。

いい仕事をした（笑）

5章：初対面（前書き）

書き置き分が少なくなってきました。
頑張らないと、追いつかれちゃいそうです。

5章：初対面

今、学園では怪談が流行っているらしい。
要するに、山岸風花が行方不明になりました。
タルタロス内をさ迷ってしまいう前に助ける予定が、すっかり忘れてしまっていた。

ゴメン、風花。

早めに助けるよう頑張るから許してね。

怖いのが分からないような怪談話を聞いたその日、先輩二人に嵌められたゆかりが、必死に調べ物をしていた。
ホント可愛いんだから。

生暖かい目で簡単に嵌められるゆかりを見つつ、自分にできることをしにいくと思う。

というわけで、学校に忍び込んでみました。
以前、順平がやったような方法で。

一人探索なので、一回で見つけることは難しいだろうけど、心強い味方がいるのでなんとかなるだろう。

『確か、場所は体育館だったよね』

こっそり職員室から鍵を拝借し、体育館の鍵を開けてから、鍵を返しておく。
鍵が無くなったって騒ぎになったら嫌だし。
あとは、中で影時間になるのを待つだけだ。

―― 影時間

「やあ、待たせたね」

「お母さん、会いたかった」

『私も会いたかったよ』

「それにしても、思い切ったことをしたね」

『必要な事だから、仕方ないよ』

早速、三人で搜索を開始する。

逃げるシャドウを追いかけ回しつつ、各フロアを隅々まで探すのだが、気配すら感じられない。

まるで、向こうから避けられているかのように。

『？ 今、何かが引つ掛かった気が……』

「……人の気配、あるけど避けられてる」

「僕らに気付いていて、危険と判断してそうだね。 当然、一緒にいる人も」

『……（断じて私は危険じゃない！！……自信がないけど）』

朱里が新事実に撃沈して使い物にならなくなった為、仕方なく搜索を中断となった。

金曜日、倒れていた少女達の共通点に気付いたゆかりから、明日ポートアイランド駅のたまり場に向かうと聞かされた。場所を聞いて順平が青ざめていたが気にしないでおく。

今日のうちから、たまり場の連中と交流（躰ともいう）をしようかとも考えたが、楽しみはとっておくことにした。

次の日、放課後は神社にいる女の子と交流してから、寮に帰る。寮に帰ると、ラウンジにはやる気になっているゆかりと若干青ざめた順平がいた。ちなみに私は、あそこにいるであろう人を思いワクワクしている。早速、三人で件の場所に向かう。

そして、ついて早々絡まれた。どう考えても喧嘩を吹っかけるような言い方した、ゆかりが悪いと思う。

というわけで黙っていてもらうことにした、脅して。

『ゆかり、今度モナド行きとしばらく黙るのとどちらがいい？』
ニッコリと笑いながら言えば、ゆかりは青ざめて黙った。
その笑顔を見た不良も順平も、自分が言われたわけでもないのに固まっていた。

『ここに来ていた月光館の女子生徒について、何か知りませんか？』
「……いや知らねーよ」
怯えながら答え、係わり合いたくないと逃げていく。

……失礼な。

仕方なく他に話を聞けそうな人を探す。

「ここは、ためーらのようなのが来るような場所じゃねーぞ」

「あつ！この間、真田先輩の病室に来ていた先輩ですよね」

現れたのは荒垣だった。

実は、私だけ真田先輩のお見舞いには行かなかったので、荒垣とは初対面だったりする。

事情を説明し、話を聴くことに成功する。

前回と同じように、風花は行方不明になっているらしい。事態の重さに、先輩方に報告することになった。

二人には、先に行つててもらい、一人で戻る。

「……さつさと帰れと言つたはずだ」

『名前、聴くの忘れてたんで。私、橘 朱里っていいいます、先輩は？』

「……」

『……真田先輩に聞き出したほうがいいですか？』

「チツ……荒垣だ」

『荒垣先輩ですね、また、来ます』

ニツコリ笑つて先に行かせた二人を追い掛けて行く。
後ろから荒垣の新たな舌打ちが聞こえた気がした。

5章：初対面（後書き）

そういえば、今まで荒垣さんでてなかったなあとゲームを進めてて
気付いた。

無理に話を合わせた形になってしまいました。

6章：救出作戦（前書き）

主人公の暴走がデフォになりつつある。
何故だろう？

6章：救出作戦

そんなこんなで夜中に学園に忍び込むことになった。

職員室に一緒に向かうのはゆかりで、ちょっぴり悪戯心が騒いだのでからかった。

反応がとても楽しかった。

鍵も無事に見つかり、体育館からの侵入組と外で待機する居残り組に別れる。

今回の居残り組は、私と桐条先輩になった。

暫定的にリーダー（仮）ではあるけど、いい加減先輩が引率すべきだと押し進めた。

——影時間

『しばらく、外にいます。何かあつたら呼んでください』

もう少ししたら現れるだろうシャドウに備えて、外で待機しようと思う。

こういうときに、千鳥の錯乱能力があれば便利なのに。

風花のサーチ能力は油断できないから。

「暇そうだね」

『先輩が近くにいるけど出てきて大丈夫？』

「あの人には、僕らを感じできないよ」

「朱里母さん、大きいの近くにいますよ」

『どこにいる？』

「こつち」

ニユクスに案内されてシャドウのもとに向かう。
勿論、先輩には言わないで。

タルタロスから10分程離れた所にイレギュラーシャドウはいた。
ルシフェルのマハジオダインで一体が倒れるともう一体には自分の
斬撃で弱らせることに成功する。

後は、封印すればいいらしいがどうしたものか……

確か、イゴールの話では私の中にデスを封印したように封印ができるはずなのだが、ぶっちゃけ方法が分からない。
仕方ないのでトドメを刺すしかなかった。

タルタロスのエントランスに戻ると先輩に怒られた。

桐条先輩には戦闘が筒抜けなうえ、風花がイレギュラーに気付き皆
が下に戻ってきていたらしい。

ここぞとばかりに、説教された。

時間にして10分位たったところで、やっと説教から解放されて風
花と話することができた。

『はじめまして、橘朱里です』

「あっ山岸風花です。もしかして、四・五時間前にも、助けてくれようとして来ていた人ですよね？」

『あっ、その話は他には内密に！』

「……どういうことだ」

さらに、説教されることになった。

その帰り道、話を変えたくてふと空を見上げると綺麗な満月だった。

『今日は満月ですね』

「無理矢理な話題の変え方だな」

「そういえば、以前寮が襲撃された時も満月でしたね」

「……！」

先輩二人には何かしらの心当たりがあるのか考えこんでいる。

「おい、美鶴」

「ああ、先月の満月のときにもイレギュラーの反応があった。あ

のときは、すぐに反応が消えたが……」

「じゃあ、満月の日にイレギュラーが現れてるんすかね？」

「その可能性は高いな」

「次の満月の日は、要注意だな」

正直、失敗したと思った。

何かしらの外せない用事を、満月の度に作らなければいけない。

このままでは、動きづらくなる。

今更、発言を撤回できるわけもないし厄介なことになった。

「あの日、影時間中に寮にいなかったよな？」

『そうでしたっけ？』

「寮に戻ったら話をしようか」

『……』

今日は厄日だ……

7章：新メンバー（前書き）

日々暴走を続ける主人公。

7章：新メンバー

昨日は、散々の説教＋疲労＋1時間の正座のおかげで風邪を引いた。もう、最悪としか言いようのない感じた。

私は、絶対忘れないんだから。

覚悟してるよ、テレッテめ〜！

救出作戦から3日。

私の外出解禁は今だに続いているなか、夜に作戦室に集まるように指示されたので早めに寮に戻る。

作戦室には、シャドウ討伐メンバーと大嫌いな理事長が集まった。

まず、話は風花の勧誘だった。

風花が断るはずもなく、直ぐに入部してくれた。

そして、サーチ役が見付かったので桐条先輩が前線に復帰することになった。

次いで、イレギュラーについての話。

昨日の満月にイレギュラーが出現しているかもしれないとの話があったが、その話のことだ。

今までのことを考えると、恐らく満月の日に現れているので間違いないだろうとのことだ。

取り敢えず、次の満月にも現れればほぼ確定だそうだ。

知っていただろうに白々しく話す理事長が忌ま忌ましい。

このまま、理事長の手の上で踊らせるわけにもいかないし、本格的に一人行動を始めようと思う。

もちろん、誰にも内緒で。

そして、今日は風花の入寮の準備もあってお開きとなった。

あと、夜の外出禁止が明日から解禁になりましたー！！

イロイロと頑張った結果、勝利をもぎ取りました。

憔悴している者もいるけど、仕方がないよね。

私の邪魔をするのが悪い。

そっというわけで、骨身に染みたメンバーは新ルールを作りました。

“ 何があっても、橘の邪魔はしてはいけない ”

何をしたのかつて？

ちよっと赤くなったり、青くなったりするような悪戯しただけだよ？

いや、どちらかというと青ばっかりだった気もするけど。

7章：新メンバー（後書き）

明日には、番外として何をやったのかをアップしたいと思います。

番外：説教と報復（前書き）

風花救出後のお話。

番外：説教と報復

山岸風花を無事に救出したその日。

先輩二人が風花を家まで送り帰ってきてから1時間。

私は今――

作戦室にて、正座しながら先輩二人に説教されています。

正直眠くてたまりません。

眠くて説教なんて完全に右から左の状態です。

なぜ怒られているかつて？

勿論、“一人タルタロスIN体育館から”が風花からばらされちゃったのと、“風花救出作戦の最中に一人行動”していたからです。

本当は先輩達が風花を送って行く隙に、部屋に逃げる予定だったのに、ゆかりと順平によって阻止されたのだ。

絶対にモナドに置いて行つてやる。

刈り取る者出現しているに散開してやる。

ガルダインとジオダイン浴びせてやる。

つらつらと頭の中で、今後の報復について考える。

勿論、説教なんて右から左だ。

「——聞いているのか!！」

『聞いてますってば』

「とにかく、しばらくは夜の外出禁止だ」

『ええ〜っ! それは困ります! 田中社長や無達とのコミュが!』

「……反省してるのか?」

『うう〜……』

こうなったら、寮からの脱出経路を作らないといけない。

しばらくとはいえ、外出できないなんて無理だ。

グレてやる。

「桐条君、真田君。今日はもう遅い、それくらいに……」

現れた理事長が、私達に声を掛けてきた。

声掛けるの遅いんだよ、理事長のくせに〜!

心の中で悪態をつく。

先輩方は言い足りなさそうではあるが、なんとか解放してくれた。

ただ、1時間近く正座していたお陰で、足がしびれて直ぐには動けなかった。

地味に足痛い……

もう、絶対仕返してやる……

どんな報復が、ダメージがでかいか。

赤面させ、かつ青ざめさせてやるうじゃないか。

次の日、風邪で弱っていたものの、保健室の劇薬で回復しました。
先生、ありがとう。

『というわけで、私を売り渡した二人と私に外出禁止を出した二人に、悪戯というなのウサ晴らしをしたいと思います』

「はい！」

「要するに暇なんだね」

『だって外出出来ないんだよ?! ただでさえ、色々とMAXで勉強する必要ないから、コミュ上げに使命感じてるのに』

「飛行系ペルソナで出られるでしょ?」

『居場所サーチされたら一発じゃん』

「お母さん、困ってるの? あの人達が困らせてるの?」

ぷうつと頬を膨らませて、怒るニユクスは可愛い。

でも、このままだとニユクスが皆を敵視してしまいそうだ。

「どちらかと言えば、困らせたのは朱里だね。 向こうは心配してるだけだし」

『だから、大丈夫だよ』

ニユクスの頭を撫でてやる。

『むしろ、外で鬱憤を晴らしてきてと言われるようにしたいんだよね。 だから、知恵を貸してね?』

「はい」

ファルロスとニユクスを巻き込んで作戦会議を開始する。

1・寮でアンチグルメの料理人の手料理を振る舞う。
選択を間違えると自滅する可能性あり。

2・寮の監視ビデオ（各部屋用）をロビーで上映。

3・タルタロスでのアレな服を着た写真を、掲示板へ。

4・部屋にGを投入する。

5・すっかりガルダインやブフダインなどの弱点をかまして見る。

6・モナドで散開もしくは、刈り取る者出現で散開。

『さあ、どれがいい』

『はい、アンチグルメの料理人の手料理ってどんなの？』

『有名なのは、某高校生若女将達の作った“ムドオンカレー”かな？
一口で気が遠くなるらしいよ』

『はい、アレな服って？』

『水着やメイド服などのネタ服だよ。 あれ、着たり着せたりして
周りの反応見るの好きなんだよね』

『写真撮ったの？』

『撮ったよ？ 影時間でも作動する桐条グループ特製カメラで』
何当たり前な事言ってるんだ。

『……後で見せてね』

『うん。 まあ、直ぐに出来そうなのは、2・3・4かなと思うんだよね』

『僕は4は嫌だな』

『私も嫌』

『でも、ゆかりと桐条先輩には効くと思うんだよねー』

サラサラと、今まであげてきた報復内容と実行される被害者名を新しい手帳に箇条書きにしておく。

さらに2・3・4には、赤でチェックをいれておく。
題して報復手帳。

後は、これを発見し易いところに、かつ中を見易いように置いておけばよい。

勝手に恐怖にかられること間違いなしだ。

放課後には、皆の目につくようにGホイホイを買いに行ってみたり、カメラの現像に行くんだとか話を振ったら完璧だ。

外出解禁が解けるまで怯え続けるがいいさ!!

8 章：隠密行動（前書き）

いい加減、主人公を落ち着かせたい……無理だと思うけど

8章：隠密行動

桐条先輩から引き続きリーダーを続けて欲しいと打診された。

してもいいのだが、このままだとズルズルと別行動できなくなりそうだ。

もともと数える程しか皆とタルタロスに行っていなかった気もするが。

忙しいと渋ったら、今のところ保留でいいからと勝手に保留にされた。

風花参入の翌日の影時間。

風花の初タルタロス。

ちゃっちゃと最上階まで登りきって早々にエントランスに戻る。

『上がれるとこまで上がったことだし、“アツチ”いこうか』

朱里は満面の笑みを浮かべて、階段横にある大きな扉を指差す。

回りは、顔を引き攣らせる。

『まずは、ゆかり・真田先輩・桐条先輩で。そのあと、ゆかりと

順平交代ね。……大丈夫、地返しの手も反魂香もたくさんあるか

ら』

「……（全然大丈夫じゃないっ?!）」

最後の付けたしの言葉に、自分の最後を予感して凍り付くのが2名。

『それじゃあ行こうか』

——戦果報告

死亡回数

- ・ ゆかり 1
- ・ 真田 2
- ・ 桐条 1
- ・ 順平 1

ゆかりはレベルが63になった。

真田はレベルが55になった。

桐条はレベルが50になった。

順平はレベルが60になった。

風花はレベル50になった。

モナド内での散開の恐怖にさらされたメンバーは精神的に打たれ強くなった。

自分と風花以外が疲労や風邪になった。

皆が潰れた次の日、いつも着ないような服装に着替えて、ポートアイランド駅前広場の外れを回っている。

今日の目標は荒垣先輩との接触。

ついでに、ストレガとも接触できればなおよし。

『いないなあ……』

風花のようなサーチ能力でもあれば捜せるのだろうが、生憎戦闘能力しかないので地道に捜すしかない。

ファルロスやニユクスを頼るという手もあるが、見られたときに、いいわけするのが面倒なので今回はパス。

いっそ、向こうから接触してくれないだろうか。

荒垣やストレガの居そうな所を歩いて回るうちに、0時になり影時間へと変わる。

『……そっか、影時間に動ける人がいれば接触してくるかも』
そうと決まれば、早速行動。

『荒垣先輩いませんか？ 出てきてくれないと、あることないこと真田先輩に吹き込んだじゃいますよ』[♪]』

何回か別の場所で同じ事を繰り返していると、嫌そうに荒垣が出てきた。

『こんばんは、先輩』

『この間の奴か…… お前、また来てたのか』

『また、来ますって言ったじゃないですか』

ややげんなりした表情を浮かべた荒垣を可笑しそうに笑う。

『皆、風邪で暇なんですよ、今日』

『はあ？』

『さらに、アンチグルメの料理人の手料理で追い込まれてるはずなんですよね』

『……意味がわからねえよ』

『分からない方がいいですよ、胃腸に9999のダメージを与える料理なんて……』

『……』

味はおろか、食感すらもおかしいあの弁当。

よく分からない物が飛び出して、たまに動いていたりするあの

料理。

思い出すだけでも地獄だ。

『まあ、要するに荒垣先輩と話がしたかっただけです』

「……」

『いつか一緒にご飯行きましょうねー』

今日はこのくらいでいいかと思い帰ることにする。

何処からか視線を感じるのは、ストレガがいるからだろう。

今は、こちらに興味を持ってくれればいい。

いずれ向こうから接触してくるだろうから。

帰り道、回りには人はいないのでファルロス達に聞いてみる。

『ねえ、寮の中どうなってると思う？』

「どうって？」

『風花の手料理によつての死亡者の話』

「……」

『思いがけず“報復手帳”の通りになってるんだよね』

『可哀相に……』

『……まあ、明日の朝にはお粥でも作ってあげるよ』

『いいなあ、朱里の手料理』

『母さん、私も食べたい！』

『今度、二人の為にクッキー焼くよ』

「わーい！」

寮の前まで、仲良く三人で手を繋いで帰った。

9 章：接触（前書き）

そろそろ、運命の別れ道が近いです。
今回は、運命を変える為の行動第一弾。

9章：接触

寮に戻ると2体の屍がありました。
面倒なので放置の方向で。

決して嫌いなわけじゃないんです。

一応、風邪薬と胃腸薬を準備してあげた。

明日の朝にはお粥を作っであげよう。

私からの精一杯の優しさ。

夜にあげるコミュがどちらともMAXになってしまっただけです。

なので今日も夜の街を歩いてます。

もちろん、駅でしっかり着替えて。

服装を変えるのは、実益兼ねた趣味です。

『荒垣先輩、こんばんは』

「……また、来たのか」

『来ましたよ。来るなって言われてませんし』

「……」

『まあ、来るなって言っても来ますけどね』

「……何しにきた」

『今、食生活改善習慣中なんです。牛井とかプロテインとかカツ

ブ麺とか、稀に黒い何かとか……』

思い出して青くなる。

「……（黒い何かってなんだ?!）」

『胃腸にハルマゲドンくらうんです、マジで』
軽く半泣きになる。

荒垣が亡くなつてからの数ヶ月、アンチグルメの作る料理にさらされた日々。

「——はあ、愚痴ぐらいなら聞いてやるから」

『先輩ってなんだかんだ言つて優しいですね』

本当に悲しくなるくらい優しく暖かい不器用な人。

貴方はきつと断らない。

『そんなわけで、一緒にご飯食べませんか？』

「——チツ、今日だけだ」

『ありがとうございます！』

なんだかんだ言つても優しいこの先輩は、また一緒にご飯を食べに行くだろう。

今日は‘わかつ’で荒垣とご飯となった。

「さあ、もう帰れ」

『残念ですけど、今日は帰ります。また、来ますね』

また来ると聞いて嫌そうな荒垣と別れる。

そして、一本先の路地裏に入る。

『何か用？　じろじろ見られると気分悪いんだけど』

「?!……気付いてんたか」

「意外に鋭いですね」

現れたのはストレガのタカヤとジンだった。

『用件は？』

「何、自分ら以外にもペルソナ使いがいれば気になるもんや」

『名前くらい名乗りなよ、私はアカリ』

しれっと偽名を名乗る。

ペルソナもいつもは使わないアリスを付けておいた。

「ストレガのジンや。で、こつちがタカヤや」

『物騒な名前、“復讐者”なんて』

今はこれでいい。

普段の“橘朱里”と結び付かなければいいのだから。

少しずつ内部事情をリークしてもらえれば御の字だ。

焦らずに、理事長を追い詰める材料を集めるんだから。

『まあ何にせよ、女性の前でその格好はセクハラ。次会う時は服くらい着ててよ』

ホント、視覚の暴力だ。

無事に接触できてから数回、ストレガと接触を続けた。その数回で集めた情報を整理するところなる。

——ストレガからの情報

- ・満月にイレギュラーがあらわれる
- ・イレギュラーはアルカナの順に現れている
- ・残りのイレギュラーは8体
- ・情報が洩れている（理事長がもらしている）

——理事長が隠していると思われる情報

- ・始めのシャドウを集めたの目的
- ・時間を操るのではなく、NYXの光臨
- ・イレギュラーの数
- ・12体ではなく、正確には13体（デスが抜けている）

・10年前の事故

理事長自身も生き残りであり、ゆかり父の残したデータが改竄されている

できることから、コツコツとやるしかない。
守ると決めたのは、私自身なのだから。

9 章：接触（後書き）

今回、1 番書きたかったのは、タカヤの格好に対してのセクハラだ
って訴えることだったりする。

キタローだったらスルーするだろうけど、女主人公なら絶対突っ込
むだろうと信じてる。

10章：封印（前書き）

相変わらず、好き勝手する主人公。

10章：封印

もう、まもなく満月の日がやってくる。

憎むべき、ラヴァーズのシャドウ。

あの精神攻撃で、どれだけ恥ずかしい思いをしたことか。

次の満月は7月7日。

場所は白河通りのホテル。

現れるシャドウは2体。

上手く封印できればいいんだけど、世の中そんなに甘くない……

アイギスカムバック！

私にデスを封印したアイギスなら何か知っていそうなのに。

――7月7日 影時間

体調不良と証して、待機メンバーをもぎ取ることに成功しました。皆、私のスパルタでレベルだけは高いから、倒すのはわけないだろう。

ただ、私がいなかった場合、シャドウはどうなるのか試したくなつて待機してみた。

ストレガ対策も兼ねて、手札は多い方がいいよね。

決してラヴァーズと闘いたくないからなわけじゃありません。

法王のシャドウを倒して、ラヴァーズのシャドウの精神攻撃をくらい、中が大騒ぎになっている間、暇なので回りの見回りするという名目で離脱中。

『中のシャドウは無事に倒せてる？』

「倒せてるけど、僕らと一体化したわけではないから、時間を置いたら復活しちゃうかも」

『弱ってたら封印できないかな？』

「さあ、どうだろう……」

『そもそも、ファルロスってどうやって封印されたの？』

「アイギスと相打ちになったところまでしか覚えてないんだよね、実は」

『そっかあ……』

結局、やるだけやってみるしかないんだよね。

ファルロスと別れて、ホテル前に戻ると、シャドウを倒し終えたメンバーが調度出てきたところだった。

『誰と誰がペアで飛ばされました？』

皆の顔色を見ればまるわかりだけど、聞いた方が面白いと思ったので聞いてみた。

見た感じ、真田・桐条ペアとゆかり・順平ペアで飛ばされたっぽい。桐条先輩とゆかりが喋るなよと、二人を睨んでいる。

『で、見たの？ 見られたの？』

「……（喋ったら処刑だっ！）」

「……（話したらどうなるかわかってるよね）」

「……」

『……ブククツ、アハツアハハハツ』

「朱里ちゃん？」

態度でまるわかりなのがわからないのだろうか。

「ってか、もしかして見てたわけ？」

『見なくたって、わかるでしょ？ 真田先輩と順平の顔が赤くなって、桐条先輩とゆかりが憤慨するようないことがあったことくらい。』

そのうえ、シャドウはラヴァーズだったら予想つきますよ』

「……かまをかけたのか」

『はったりっていい言葉ですね？』

ニツコリ笑いかける。

「……（笑顔が怖い）……」

（自分以外の）メンバーの心が一つになった。

帰る途中に、忘れ物をしたということにして、ホテルに戻る。

周囲に、メンバーもストレガもないことは確認済み。

ファルロスとニュクスを連れて、ホテルの一番広い部屋へと向かう。中には、2体の弱体化したシャドウ。

ニュクスのおかげで、大人しくなっている。

『えーっと、私に封印されなさい？』

「何で疑問形？」

『気分。 ニュクスからもお願いして？』

「うん！ 母さんの中に入って？」

ニュクスの指示を受けて、2体のシャドウがスウィーツと消えていく。『どう？』

「封印されたのかな？」

「一緒になったよ、あの子達」

「封印先に僕らがいたからかな？」

『えっ失敗？』

「封印には成功しても、合体させちゃったみたいだね」

倒すのと大差ないんじゃない？……

でもシャドウがニユクスのお願いは聞くことがわかったのは、収穫があつたともいえるのか？

気分的に疲れたような気がする。

10章：封印（後書き）

休み中に書き溜めておきたいものです。

11章：明かされた真実（前書き）

わりと主人公がおとなしめだから、いつもよりはシリアス調になっ
ているはず。

11章：明かされた真実

満月の日から4日過ぎた。

疲れもとれて、コミュの進み具合もとても充実している。

なのに私以外のメンバーの様子が明らかにおかしい。

理由もわかっているし、どちらの言い分・事情を知っているだけに心苦しい。

でも、これは自分で乗り越えるしか方法はないのだ。

何より、私自身が手一杯で構うことができないでいるのだが。

夜に作戦室に集まるように指示があった。

満月のイレギュラーについて新たに判明したことがあるとのことで集合することになったのだ。

メンバーが集まると、意を決したような表情でゆかりが桐条先輩に厳し目に質問をぶつける。

先輩の強引なやり方への違和感、10年前の真実。

シャドウやタルタロスや影時間について、本当に何も知らないのかと。

その問いに桐条も真摯に答え、黙っていたことを詫びたうえで、協力を願う。

結局のところ、今美鶴を責めたところでどうしようもないのだ。

わかっていても、感情が高ぶっているのだろう、ゆかりはどうしても責め立てるような言い方になってしまう。

『ゆかり、落ち着いて』

「でもっ！」

『当事者でもない先輩を責め立てても意味ないよ。大体、こんな重い話簡単に話せるはずがないでしょ？』

メンバー内の雰囲気が悪くなる。

気持ちを切り替えさせようと明るく、幾月が皆に話し掛ける。

「言い忘れていたんだが、イレギュラーのシャドウについてわかったことがある」

「何ですか？」

「イレギュラーはアルカナの順に出現しているようなんだ」

「今、現れたのは“魔術師・女教皇・女帝・皇帝・法王・恋愛”でしたよね」

「ということはどういうことだ？」

「残りのイレギュラーは、『戦車から死神』までの7体」

言葉を盗ったかのように上手く幾月の会話に被せ、最後まで言わせない。

さあ、どうなのか。

「……いや、当時の資料に飛び散ったシャドウは12体とされているから、6体だと思うよ」

『その資料は信用できる物なんですか？』

「ああ、大丈夫だよ」

さらりと交わされた。

ぼろを出せば良いものを。

『そこまでわかっていているなら、早く伝えるべきだったのでは？』
不信感を持っているのだぞと言わんばかりの態度を示す。

勿論、幾月に対してだけに向ける。

（自分以外の）後味の悪いまま、解散となった。

再来週からテストもあることだし、タルタロスを控えつつ、コミュ
上げを頑張ろうと思う。

ギスギスした空気を、私は全く気にせず充実した時間を作っている。
メンバーのコミュを上げることができないので、神社の女の子コミュ
を中心に、学園内コミュを上げるのに専念する。

勿論、勉強は一切しない。

――7月14日 期末テスト開始

Q・水脈探しとして発達した、探し物の自然魔術は？

A・ダウジング

――7月15日

Q・欧米で“デビルフィッシュ”と呼ばれ、あまり食べる習慣が無
い生物は？

A・イカ

――7月16日

Q・鎌倉幕府を創設した人物は誰か。

A・源頼朝

――7月17日

Q・夏目漱石の作品の題名を選びなさい。

A・論敦塔

――7月18日 テスト最終日

どれも簡単で仕方がない。

今回のテストも一位を頂きた。

テストが終了しても寮内の雰囲気は悪いままだった。

そんななか、風花と順平が雰囲気を変えようと頑張っていた。

そこに、毎回自前のマハブダインで空気を凍らせるおっさんが今回だけは、良い仕事をした。

20日から22日までの屋久島旅行。

桐条先輩の父親が調度休みを取っているらしい。

これを気に、桐条父と裏で手を回すのも良いかもしれない。

取り敢えずは、ニユクスの水着と夏服を揃えてあげようと思う。

12章：屋久島（前書き）

更新遅くなってすみません。

最近、上手く次に繋がられなくて難産気味。

12章：屋久島

自分の水着の他にもニユクスの水着なども用意して、20日からの屋久島旅行に備える。

影時間にこっそり桐条家別荘から抜け出して、ファルロスとニユクスとで遊ぶ予定だからだ。

あと、ついでに皆の写真も撮っておくのも忘れない。
脅しのネタは重要だと思う。

飛行機と船を使い、屋久島に向かう。

天気も良いし絶好の旅行日和だが、どこか空気は重い。

和ませようとして空回りしている順平を生暖かい目で眺める。

勿論、手助けする気はない。

着いて早々、桐条父にと対面した。

今は、皆がいる為話かけられないが、接触する時間を作りたいと思う。

ともかく、今は海を楽しむために水着に着替えて、桐条家のプライベートビーチに向かう。

海に出ると、順平のプチセクハラモドキにあうが、軽くスルーする。何度かタルタロスで着たこともあるのに、このくらいで恥ずかしさを感じるわけがない。

でも、ム力つくことには変わらないから、おもいつきり突き飛ばして、頭を掴んで海に突っ込ませてやった。ざまあみろ。

そして、皆より早めに切り上げて桐条家別荘に向かう。

近々、桐条父との対談を実行するために、誰にもばれずに事を運ぶ必要があるのだ。

味方は必要だから。

気配を消して、桐条父の書斎へと忍び寄る。

中に、彼一人であることを確認し、扉をノックする。返事を待ち、中へと入る。

顔付きはなかなか悪人顔だが、怖いとは思わない。

だって、もっと怖いものを知っているから。

刈り取る者とか、精神的に追い詰め過ぎて何かのネジがぶっ飛んだメンバーとか、何か分からないものがはみ出た弁当とか。

これらに比べれば、何だって怖くない。

後日、東京にて対談する時間を作ってもらえるよう、約束を取り付ける。

その際の注意事項として、他のメンバーやダジャレの寒いおっさんには、話を漏らさないよう頼んでおくことも忘れない。

話してみると意外にもいい人だった。

夜、桐条父から話を聞くことになった。

桐条先輩の祖父の行った計画であるシャドウを集めて“時を操る神器”作ろうとしていたこととか、桐条祖父の感じていた虚無感。

そして、流された事故の様子を伝える古い映像。

確か、最後の内容が改竄されていたはずだ。

その映像を残し、事故の原因となったのが自分の父だと分かり、ゆかりは外へと駆け出す。

ともかくゆかりを追いかけることにした。

ゆかりは浜辺にいた。

真実を知って打ちのめされたのだろう。

涙ぐんでいるのが見えた。

ずっと信じてきたことが、ひっくり返されて、心の支えを失ってしまったようなものだ。

でも、私には慰める資格はない。

更なる事実を知っているのに、今から起こるであろう未来を変える為に、行動を起こしているのだから。

ただ、ひたすら聞き手として話を聞く。

私に言えるのは、一つだけ。

『お父さんを信じて』

二人で話していると順平が迎えにきた。

帰る直前に視線を感じた。

まだ、影時間ではないのでアイギスなんだろうと思う。

取り敢えず、影時間になったらファルロス達を連れてまた海に出ようと思う。

番外：深夜の海（前書き）

本当に久しぶりの更新となりました。
のろのろ更新ですが、頑張ってアップしていきたいと思います。

番外：深夜の海

ファルロスとニユクスを連れて、こっそりと海に向かう。

飛行系のペルソナを使ってあつというまに砂浜へ。

海初体験な二人がはしゃいでいるのを見るのは、何ともほんわかした気持ちになる。

「水かけっこしよう！ 昼間、お母さん達がしていたみたい！」

「朱里！ 早くおいでよ」

『二人とも元気だねえ』

「ほら、早く早く！」

二人に手を引かれて、海のほうへ向かう。

実は昼間、写真撮影のために海には入らなかったのだ。

だから、今のうちに海を満喫しておく。

まあ、おかげで良い写真を撮れたのだが。

総攻撃を喰らって海に沈む同級生とか、海パン一丁で仁王立ちしている先輩とか、海でキャツキャツしている同級生達とか、ベタ褒めされて恥ずかしげな先輩とか、色々と思い出として残せる写真と脅すための写真のコレクションが出来たわけだ。

最近、お近づきになった某写真部の部長さんに写真の現像の仕方にならったし、現像するのが楽しみだ。

13章：鋼鉄の乙女

影時間にはしゃぎすぎて、少し寝不足気味だ。

まあ、二人が凄く喜んでくれたので良しとする。

とはいっても、朝から海に出る元気はないので、女子皆で縄文杉の見学に向かうことになった。

桐条家のメイドさんに、書き置きを男連中が水着で外出て行く寸前に渡すように頼むのも忘れない。

そのほうがきつと面白いから。

昨日のこともあって空気が重い。

風花がどうにかしようと頑張っているが、空気を悪くしているのが二人もいるのでなかなか大変そうだ。

ちなみに、私は空気を読んだうえでその空気をぶち壊すか、あえて読まずにスルーするのが専門のため、今回は大人しく口を挟まない。

屋久杉巡りをしていると、理事長から電話が入る。

対シヤドウ兵器が行方不明になったらしい。

それも戦車であるらしく、皆慌てている。

話を聞いた限りは大事件なのだが、いなくなったのが何かを知っている身としては苦笑いを浮かべるのみだ。

取り敢えず、武器を取りに別荘に戻る事になった。

途中、ゆかり達とはぐれてしまい、大きな屋久杉の前に出てきてしまった。

どうするか迷っていると一人の少女が現れた。

『こんにちは』

じつと私を見てくる少女に話し掛ける。

「私の一番の大切は、あなたの側にいることです。」

私は少女に手を差し延べ、私に少女は抱き着く。

限りなく、機械から人間になった少女アイギス。

私を大切だと思うのは、過去の事故からくることだとしても、慕ってくれるのはやはり嬉しい。

そこに、他のメンバーもやってきて、私とアイギスを見て固まっている。

私やアイギスには悪気はなくても、端から見ると可笑しいものらしい。

私には、影時間に現れる二人に良く抱き着かれるから、気にならなかったけど。

別荘へ戻り、アイギスの説明を受ける。

今のアイギスは表情がやや固い。

まだ、機械よりなのだから仕方ないといえば仕方ないのだけれど。今から、どんどんと人間らしさを手に入れていくだろう。

アイギスの話が終わり、近くのレジャー施設の話に移った。

だが、理事長込みのカラオケだけには、絶対に行きたくないのので、全力で回避した。

勿論、自分だけ。

次の日、アイギスも連れて海に向かった。

数名、昨日の影響を受け、ややブルーになっているようだが、気にしない。

逃げ切れない奴が悪いのだ。

今日もできるだけ、写真撮影をして少しだけ遊ぶ。

順平が総攻撃をくらい倒れると、アイギスがうっかり本気の追撃しようとして、皆が慌てて止めていた。

私は皆から離れて、笑ってそれを眺めるに留めた。

後に、あの子の私の笑みは黒かったと指摘された。

勿論、わざとです。

14章：夏休み前半

屋久島から帰り着いた次の日、朝っぱらからアイギスから寝起きドツキリをされた。

分かってはいたけど、この寮、プライバシーなさすぎやしないだろうか。

自分の部屋の監視カメラには、ちょっとした細工をして録画できないようにしてあるのは秘密だ。

連休明けてすぐ、学期末のテスト結果が発表された。

勿論、学年トップで幸先良い夏休みを過ごせそうだ。

まあ、部活で前半は潰れるけれど、それもまたよしといったところだ。

寮に戻ると、天田君が来ていた。

夏休み中、寮で預かることになっているのだ。

ちよっぴり大人びていて、生意気な可愛い小学生。

7月中はあまり構えないけど、8月に入ったら、いっぱい構い倒してあげようと思う。

ついでに、写真もいっぱい撮りたいな。

勿論、何の為のというのは言わなくてもわかるだろうけど。

一週間の猛練習の末、八十稲葉での合宿は、なかなか有意義なものとなった。

何がつて？

主に、宿泊先が。

温泉良し、料理良し、部屋良し。

旅館の娘さんが、わざわざ迎えに来てくれたりと至れり尽くせりで、叶先生グッジョブ！

ついでに、恋愛話と怪談で盛り上がって楽しい時間を過ごすことができた。

寮に帰ると、影時間中に外でシャドウ反応があった。

神社の前には、傷付いたコロマルがいた。

コロマルにも、ペルソナの能力に目覚めてしまったらしい。

今は影時間なので、応急処置に留めて、影時間が過ぎしだい病院に連れていくこととなった。

次の日の影時間、久しぶりに家族会議を決行することとなった。
合宿のこともあり、なかなか時間がつくれなかったのだ。

「今度のアルカナは正義と戦車だったよね？」

『で、防空壕に閉じ込められると』

ここで、ストレガとの初接触があったはず。

でも、私のことがバレるのは拙い。

「別行動し難くなってるからね」

『いっそ、病欠するか…… いや、先回りして防空壕の中でさっさ

とシャドウを封印しちゃうとか?』

「ママならできるよ、きつと」

『ありがとう、ニユクス』

ぎゅっと抱きしめる。

「フツ。大好きよ、ママ」

「狡い！ 僕も！」

後ろにペタリとくっつかれる。

相変わらず、ラブラブな一家である。

15章：密約

時間の合間を縫って、路地裏をまわる。

狙うは勿論、上半身裸のセクハラ教祖率いるストレガ。

次の満月に接触してくるはずだから、早めに手を打っておきたいのだ。

深夜の外出、3日目にしてやっと三人を見つけた。

あの三人は、存在が浮いてるから居てくれさえすれば、捜すのはわけない。

『やあ、御三方。久しぶりだね』

「……アカリ、やったか」

「私達に何か用ですか？」

『用って程のことじゃないよ。確かめたいことがあってさ』

「何や？」

『次の満月にあの人達に接触するつもりなんだってね？』

「……だれから聞いたんや」

声色低く尋ね返される。

『情報元は、ヒ・ミ・ツ。接触するなら、ついでに伝言を頼もうかなって思っ』

できる限り、普段の私とは掛け離れた印象を持つような態度で話す。

「貴女は、あの人達の味方なんですか？」

『目的の為に泳がせてるだけ、かな？』

「どういう意味や！」

『私は、私の為に動いているだけだよ』

欲しいのは、皆で笑い会える未来。

だから、滅びを私は望まない。

そして、その中には貴方達だって入っているんだ。

「貴女の計画が何なのかわかりませんが、私達の邪魔はしないでいただきたいですね」

『邪魔はしないよ？ 私の邪魔にならない限りはね』

睨み付ける視線をものともせず、ニツコリ笑いながら伝言内容を告げる。

『“外に三つ、中の庭に一つ毒の花が咲く。特に庭にある花には用心しろ”、と』

前回、ファルロスから言われた言葉の一部。

今なら、ストレガと理事長のことだったんだとわかる。

「なんかの予言のようやな」

「そのような内容、自分で言いにいけばいいでしょう?」

『まだ、私が接触するわけにはいかないの』

凄く残念そうに言う。

そして、伝言を頼むからには報酬として私しか知らない情報を教える。

『イレギュラーのシャドウは、飛び散った12体の他に、封印されているものが1体いるんだ』

どこに封印されたかまでは、わかってないんだけどねー、と続ける。全部を教えるつもりはない。

でも、少しだけ皆にこの情報が流れないかなあと期待して話した。

『じゃあ、お願いね』

そう言い残し、寮に戻る。

さて、後はどのようにして満月の日に一人で行動するかだ。

16章：体調不良計画

私にとっては三度目の満月がやってくる。

今回も仮病もしくは、体調不良になる気満々である。

スパルタの成果は上々で、そこら辺のシャドウは瞬殺できるくらいになっているし、武器もわざわざ私のペルソナ達を素材にした最強の物を用意したのだから、負けるはずがない。

というわけで、戦闘に関しては不安材料はないため、自分のことだけをなんとかすれば良い。

考えた末に、色々とMAXな為に滅多な事では疲労にすらならない私のために、用意したのはコレ。

“風花の手料理”である。

しかも、クラブで作ったお菓子付き。

なんと高確率で三途の川を渡れちゃうすぐれもの。

一度、一人タルタロスでシャドウの口に投げ込んだところ、ムドオン・ハマオンのダブルパンチを与えてくれた。

最悪本気で寝込むかもしれないが、今まで死人は出てないし、軽いものでバスタ効果くらいだったし、アムリタを使えばなんとかなるだろう。

これを、当日の昼に食べてグロッキーになろうと思います。

――8月8日 満月

頑張ったかいあって、無事(?) 寮に待機となりました。

ただ、その代償はでかつた。

何がつて、体調不良の私の為にお粥を作ってくれたのだ……風花が。

何やら危険な香りのするお粥は有り難く、理事長への差し入れとして提供しました。

影時間になり、メンバーがシャドウ討伐に向かったのを確認し、理事長にはれぬよう寮からでる。

ストレガと接触するときの服装に着替えて、尚且つ、飛翔系ペルソナを利用して窓からという念の入れようである。

ベッドには、時価ネットタナカで購入したマネキンを髪と服を着せて寝かしてあるし、それ以前に私の部屋のカメラは作動していないが。

そして、離れた位置から仲間がストレガに旧陸軍基地に閉じ込められるのを確認する。

『伝えてくれたかな?』

「あの“毒の花”の話こと覚えていてくれたんだね」

『まあね。あのときは、重要なヒントだとは思わなかったんだけどね』

「僕も全てを思い出していたわけじゃなかったからね」

『向かい側の花は毒を抜いちゃって、庭の花は叩き潰すつもりだけだね』

「その時は僕にも参加させてね」

「私も手伝う」

ニッコリ笑いあう。

話をしている間に、イレギュラーを倒し終わり、理事長を呼んだらしい。

仲間達が基地を去るのを確認し、三人で奥へと向かう。

そして、前回と同様にニユクスに私の中に封印されるように、言うてもらった。

無事、封印されたのを確認し、三人で寮へと戻る。

また、説教は嫌なのでこっそり空から部屋に入る。

風花にすらばれないようにするのは、骨が折れる作業だった。

17章：夏休み後半

満月も過ぎ、取り敢えず平穏な時間を過ごせるようになった。

が、折角の夏休みなのに、残念な成績の順平を中心にメンバーは夏期講習へと出かけて行った。

勿論、私は回避済み。

私の夏休みに干渉させるつもりはありません。

満月のイレギュラーを討伐した次の日、寮でストレガとストレガに伝言を頼んだ“アカリ”という人物とその伝言の話を聞かされた。初めて聞かされたかのように驚いてみせたが、ストレガのことも知っているし、“アカリ”なる人物は私のことだし、伝言だって私が頼んだものだ。

「分からないことだらけだな」

『私、ストレガとアカリは聞いたことありますよ？』

「なんだって?!」

「本当なの、朱里ちゃん!」

『ほら、よくポートアイランド駅の路地裏行くから』

「おいおい、あんなとこ女一人で行くなよ……」

順平が呆れた顔をするが、無視する。

『ストレガって、結構有名な三人組のことでしょ？ アカリって人

も有名だよ（不良共を叩きのめしたことで）』

さも、他人事のように話す。

なんだか嘘が上手くなつたなあをつくづく思う。

『“毒の花” つてのも比喻っぽいし数の方に注意すべきじゃない？』

「となると、“外に3つ、中に1つ” が大事ってことか？」

この段階で考えることを放棄している連中は無視し、自分の意見を言う。

『特に中庭の花には用心しろ』 ってことは、私達には外に3つ、または3人。 中に1つ、または1人に、注意しなくちゃいけない っ人・物があることになるね』

「何にせよ、情報が少な過ぎるか……」

『夜間徘徊ついでにアカリと接触して探ってみますよ』

接触も何も本人なだけど。

「それは構わんが、危ないことはするなよ」

『大丈夫ですよ、あそこの不良連中に私に逆らう愚か者はいませんよ』

と、ニツコリ笑ったら「だろうな」と納得された。

最近、私の所業になれた先輩方が心配してくれず、寂しいです。

ラウンジにて、街で集めた情報を報告する。

ストレガはペルソナ使いで、タカヤ・ジン・チドリの三人組である。ストレガとは“復讐者” という意味で、彼らは人為的ペルソナ使いの被験者。

アカリもペルソナ使いで、どちらの味方もしないことを公言している。

私達の知らない情報を持っている模様。

ストレガが人為的ペルソナ使いの被験者だと知って、桐条先輩は少し顔を歪めた。

せっかく人が話しているのに、欠伸をしていた順平にはアイアंकローをかましておいた。

18章：対談

ようやく、念願の桐条父と話しをする機会がやってきた。
この日の為に、話す内容をまとめるのは大変だった。
知っていること、起こるだろうこと、起きて欲しくないこと。
そのための協力者になって貰うため。

全ては“皆で幸せになる”という私の願いを叶えるために。

夏休み最終日、桐条グループの高級ホテルの一室にやってきた。
簡単に挨拶を済ませ、本題に入る。

10年前の交通事故の真相。
最初に飛び散った12体のシャドウと、宣告者の役目を持つ13体
目のシャドウのこと。
ストレガのこと。

事故当時のビデオが改竄されていること。
裏切り者（理事長）のこと。

『これが、私の知る全てです。少なくとも、10年前の事故に関
しては情報が残っているはずです。アイギスとデスとの戦闘があ
ったのですから』

「それに関しては調べ直してみよう」

『……まもなく、影時間ですね。もう一つの証拠を提示します』

深夜12時まで、あと5秒。

4

3

2

1

0

世界が不気味な緑色の世界へと変わる。

「この姿では初めましてかな？ デスだよ。今はファルロスと名乗ってる」

「ニユクスです」

私の影から二人が現れる。

「ファルロスが10年前に私に封じられたシャドウで、ニユクスは桐条先輩の祖父が造ろうとした神器そのものです」

桐条父もさすがに驚いたらしい。

目を丸くしている。

「私と共にあるせいで限りなく人間に近いですが、彼らはシャドウです」

「僕らは朱里を通して世界を見てきたからね」

「ニユクスは最初からママの子だよ？」

「ややこしくなるから、ニユクスは静かにね？」

「はい」

途中、脱線しかけたものの、自分とデスとの繋がりを理解してもらったところで、宣告者の役目を伝える。

母なるものニユクス。

シャドウの目的。

訪れる破滅。

『始まりのシャドウ達が一つになり、宣告者によってニユクスは喚ばれる』

「そして、全ての人間が影人間になり、世界は終わる」

『終わりを望む者達から、世界を守る為に力を貸してください』
深く頭を下げる。

「……それが本当なら、願ってもないことだ。宜しく頼む」

『……はい!』

受け入れてくれたことに感謝しつつ、私の中にシャドウを封印していることや、アカリという偽名でストレガと接触し仲間達に本当の情報流すなどの、現在私のしている活動内容を説明し改めて協力を依頼する。

理事長が終わりを望む者であるため、今の課外活動部は彼の掌で踊らされている状態なので、理事長を含めて仲間達にも情報は漏らさず自分達で裏工作を進めていくことで合意した。

十分な後ろ盾を手に入れたので、本格的に“皆で幸せになろう”計画を進めていこうと思います。

19章：最後の一人

夏休み中にコロマル・天田とメンバーも増え、寮はいつそう賑やかになった。

あと、もう一人の復帰も間もなくだろう。

課外活動部のメンバー全員での食事やくだらないやり取り。一番充実していた日々。

なんだかんだ言っても、一番楽しかった時間だった気がする。

満月まであと三日。

新メンバーとして、荒垣が復帰した。

先輩方はどこか嬉しそうで、私にも心強い味方だ。

特に、食事関係に関して。

ただ、天田君だけが心なしか複雑そうな表情をしていた。

理由は簡単、天田の母親が亡くなったときのことが絡んでいるからだ。

本当に、うちの三年生は秘密主義というか、後ろめたい事を無意識に押し隠しすぎやしないだろうか。

天田君の母親のことも、当時のことを話すことで色々と和解できそうなもの。

まあ、裏から手を回して嫌でも和解させるつもりだけど。

取り敢えず、明日から満月までの二日間は、タルタロスに通い仲間のレベルを平均70で揃えます。

大丈夫、アイギス・コロマル・天田君・荒垣さんは個別で私と二人でモナドを探索するだけで、主に私が敵をボコるだけだから。

私の戦いっぷりを常に外から見ている風花にいたっては、レベルが90目の前になっている。

おかげで、サポートが充実しています。

他の連中は勿論、散開させて軽く放置し、たまに援護したりする。

皆とは数える程しかタルタロスに行っていないが、私のやり方に文句がでなくなったのは私の驍が行き届いた証と言えるだろう。

——戦果報告

死人ゼロ

ゆかりはレベルが70になった

順平はレベルが65なった

真田はレベルが68なった

桐条はレベルが70なった

アイギスはレベルが68なった

コロマルはレベルが60なった

天田はレベルが65なった

荒垣はレベルが74になった

風花はレベルが86になった

アイギスの私への依存度が上がった
天田の憧れの人が真田から私へシフトチェンジした

準備はできた。

あとは、満月を待つばかり。

20章：別行動

間もなく、四度目の満月だ。

今回のアルカナは隠者で、確か順平の馬鹿がチドリに捕まってたような気がする。

今回も捕まったら、料理同好会の試食係に任命してやろう。

そんなことを考えていた矢先、私は桐条父に呼び出されて病院にいます。

理由は簡単、ファルロスとニクスを身体に宿している私を心配して、念の為に検査を受けるように進められたから。

皆には、ペルソナを付け替えながら戦う私を調べるということで呼び出されたことになっているけどね。

そんな理由で、討伐不参加をもぎ取りました。

今回は、無理に体調不良になる必要がありません。

なんて素晴らしいことでしょう。

風花の手料理を食べるといって、危険を冒す必要がないなんて。

検査の結果は言うまでもなく、ペルソナも身体もいたって安定しているとのこと。

ただ、始めの頃ペルソナからデスが出現したことを話すと、そんな話は聞いていないと言われた。

ゆかりに確認したから間違いなく、ペルソナの暴走はあった。

なのに、この話は桐条父まで上がらなかった。
意図的に隠されていたらしい。

そんなことをするのは、一人しかない。
せいぜい、私達が掌で踊らされていると思っておけばいい。
最後に笑うのは私なのだ。

病院から一人、ポロニアンモールへと向かう。

勿論、皆が順平の拉致騒ぎに寮へと戻ったのを確認したからだ。
チドリとは、アカリとしてあったことがあるので、今会うのは避けたい。

次会うのは、彼女をペルソナから解放するときだと私は考えているから。

『それじゃあ、ニユクスお願い』

「ママの中に入りなさい」

ニユクスの言葉を受けて、シャドウが朱里の身体に封印される。

「あと、三体だね」

『やることもいっぱいだけどね』

「でも、頑張るんですよ？」

『うん！ もう、何も失いたくないから』

ファルロスやニユクスが支えてくれるから頑張れる。

『ファルロス、ありがとね。いつも味方でいてくれて。』

勿論、

ニユクスもね』

「当たり前だろう？ 僕は君のことが好きなんだから」

「私もママのこと、大好きよ」

『うん、私も大好きよ』

ぎゅっと抱きしめる。

ありがとうと大好きを込めて。

明日からまた、裏工作に走り回る日々がやってくる。

助けたい命がある。

助けたい人がいる。

幸せを充電できたことだし、また頑張ろう。

21章：選択肢

昨夜、寮では色々あったみたいだが、チドリを無事に病院に収容できたようだ。

今のところ面会謝絶となっているが、私には関係ない。

私は私のやりたいようにするだけ。

要するに、人目を忍んで接触する気満々です。

――影時間

『やつほう、チドリちゃん』

「貴女……前、会った人ね。確か、アカリ」

『覚えててくれたんだ？』

以前、タカヤ・ジンと会話していたときのことを覚えていてくれたらしい。

とはいえ、警戒を解いてくれたわけではないが。

『今回は顔を見に来たの。危害を加える気はないわ』

「……」

『まだ、顔色は良さそうね。また、来るよ』

彼女は強制的にペルソナ使いにされた為に、安定剤が必要な身だ。ちやっかり、ストレガから回収した安定剤を、桐条父に成分表と使

用した場合の危険性などを調べて貰うようにたのんである。

そして、安全性の高いものを作成してもらうと共に、彼女を一般人へと戻せるようにしたいと思っているのだ。

だからと言って、彼女の意思は尊重したいと思う。

だから、彼女には選択肢をあげよう。

このまま安定剤を使いつつ、ペルソナ使いとして生きるか。
身体の事を考えて、ペルソナを手放すか。

ペルソナを手放すと、影時間の記憶は失われるが、強い思いは残る。

私としては、チドリにはペルソナを手放して幸せになって欲しいと思うのだけど。

あとの二人は、問答無用で手放させる予定だけれども。

まあ、まずは私に慣れてもらえるように、影時間に病院に通おうと思う。

話はそれからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7787j/>

神に愛された少女

2010年12月31日16時08分発行